

広報ふくつは必要か



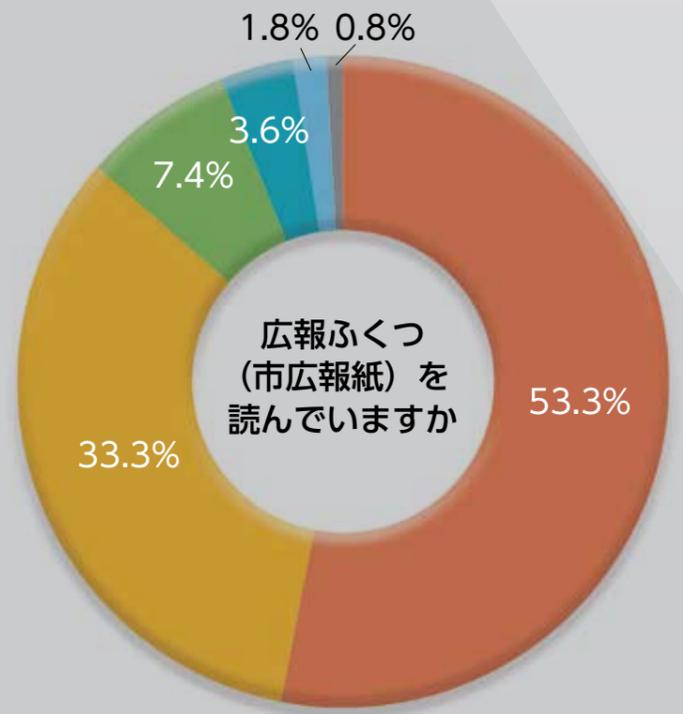
情報化社会の時代だけに、「市からの情報はインターネットだけでもいいのでは」と広報紙の必要性を疑問視する声もあります。そのような中、「広報ふくつ」が県の審査で最優秀に選ばれ、県代表として全国広報コンクールに出品されました。福津市の広報紙としては初めてのことです。そこで、これを記念して、広報紙の必要性について考えてみたいと思います。本当に広報紙は必要なのでしょうか。



ネット社会といわれるこの時代に紙媒体は必要か

インターネットが普及し、個人が簡単に情報を発信できるようになり、テレビよりもローカルな情報もグローバルな情報も簡単に入手できるようになりました。そんな時代に紙媒体は必要なのですか。果たして広報紙は読まれているのでしょうか。

市民の皆さんの考えや生活の実態を把握するために、市は市民アンケートを実施しています。平成26年11月に実施したアンケートの中に「広報ふくつを読んでいますか」という質問がありました。結果は左の円グラフのとおりです。「いつも読んでいます」が86・6%。「たまに読む」と答えた人は、足し合わせると11・1%です。この結果からみると、広報ふくつは



平成 26 年実施のまちづくり市民アンケート調査

「時間がない」と答える人は、生活に追われて忙しいことが要因と思われませんが、ひよっとすると広報紙の魅力がないだけなのかもしれません。シンプルで読みやすく、それでいて気になる特集があったり、思わず手に取りたくなるような表紙だったりすると、忙しくても読むのかもしれないですね。

「自分に関係する内容が少ない」と答える人は、「いつも読んでいます」というほどではないにしろ、そこそこ広報紙に目を通しているという人だと思えます。ただ、タイトルや見出しは見ているものの、関心を引くほどではないかと思っているのかもしれない。

広報ふくつは昨年7月からデジタルブックを採用し、パソコンやタブレットで手軽に閲覧できるようになっています。



広報ふくつ 福岡県最優秀記念

特集 広報ふくつは必要か



特集 広報ふくつは必要か

広報紙は対象者の範囲が広い
ため、掲載される内容もさまざま。コーナーによっては対象者を限定するお知らせなども多くあることから、関心を持っていない人もいます。
スマートフォンやタブレットの浸透などで、情報の入手スタイルは変化し、以前と比べると紙媒体は読まれなくなってきたりしているかもしれません。
その一方で、毎号楽しみに読んでいるという声も耳にします。「さまざまなジャンルの特集や企画があってもいい」と聞きます。

お知らせ記事と違い、特集は市政の動きや地域のことなどをテーマに取り上げ、市民や関係者取材しています。一歩踏み込み、そして掘り下げ、読者の気づきにつながるような記事を中心に書いています。そこが「今月の特集は何だろう」、「おもしろい」という声につながっているのかもしれない。

時事通信社が平成25年に実施した世論調査によると、自治体からの情報の入手方法について、広報紙は約80%で、新聞33%、テレビ25%、ウェブサイトを9%と他を圧倒。このことから広報紙は、自治体情報を得ることができる最も重要な媒体であることがわかります。
事実、平成23年に発生した東日本大震災においても、被災した自治体が、住民への情報発信として選んだのは、ウェブサイトにでも、ラジオでもない、広報紙でした。避難所や給水、遺体安置所などの情報をお知らせするために号外を何度も発行しました。ウェブサイトを断るとは違い、情報を入手するのに電力を必要としない広報紙は、生活に欠かすことができない、頼りになるものでもあります。

では必要最低限の情報のみが載る広報紙でよいかというと、そうではありません。記事を書きやすいため写真、読みやすいレイアウト、編集も必要です。更に、結果のお知らせだけでなく、今現在、進みつつある市動きについても掲載が求められています。「読まない」「ほとんど読まない」という人たちが

に読んでもらうには、更なる努力や工夫と、より高い品質が欠かせません。
市からの一方通行の広報紙ではなく、多くの市民の声が載り、共同で紙面を作り上げるような双方向的な広報紙になれば、市の考えもより市民に伝わり、人や地域もさらに輝くのだと思います。



▲広報ふくつ等を音訳し、視覚障がい者へ行政情報等を届けている音訳ボランティアふくつの皆さん。会員数は28人

実際、広報ふくつにはさまざまな人が関わっています。取材を受け紙面に登場している人たちが

ちだけではありません。陰ながら関わってきた人、関わる人たちも多くいます。苦勞して創刊したり、休日返上で取材し発行したりしてきた担当者たちや、独自取材で共に紙面を作っている広報ボランティアの皆さん、障がいのある人のために、広報紙等を音訳や点訳しているボランティアの皆さんなど、それぞれの熱い思いが広報ふくつには込められています。

人と地域が輝くため
みんなと市のいい関係のため
広報ふくつは必要

結論

ように、そしてみんなと市がいっしょに広報ふくつを作っていくかと思えます。



▲広報ふくつ等を点訳し、視覚障がい者へ行政情報等を届けている点訳ボランティアねむの会の皆さん。会員数は27人



▲地域の行事などを取材し、広報お知らせ版カメラリポートのコーナーを作っている広報ボランティアの皆さん。会員数は8人

広報紙を軸に つながる人の思い

表紙の「ふくつ」は東福岡4区の大上宏さんに書いていただきました。

この号は、障がいのある人とその家族、事業所の皆さんが登場しました。

広報ふくまの初代担当者は……

▶創刊号はゼロからのスタートですから、苦勞しました。先進地の古賀町（現在の古賀市）に指導を仰ぎ、昭和46年6月に発刊しました。原稿も手書き、イラストや題字も手書きの時代ですから、制作には時間がかかりました。町勢要覧などの仕事が重なったときは徹夜もしていました

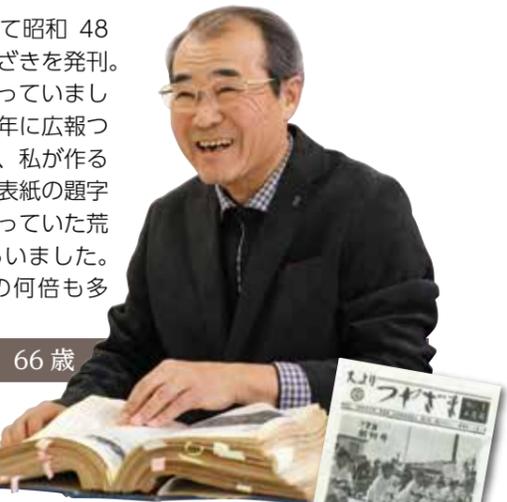
荒田修さん 70歳



広報つやざきの初代担当者は……

▶公民館報に代わって昭和48年4月、たよりつやざきを発刊。教育長と収入役が作っていました。そして昭和50年に広報つやざきに名称変更し、私が作るようになりました。表紙の題字は、広報ふくまを作っていた荒田さんに書いてもらいました。当時は回覧板が今の何倍も多かったですね

井ノ上義憲さん 66歳



◀県で最優秀（1位）に選ばれた広報ふくつ12月号。審査員のコメントでは「広報紙を見て市民が誇りを持ってそうな内容」「取材力や編集力がすごい」「アンケートまで付けて脱帽」などと高く評価されました。全国広報コンクールの結果が楽しみです